

古市の蛭子さん

（『たんなんの民話と伝説』 丹南ライオンズクラブ より）

昔々、古市の町はいろんなお店が並んでいたりと、宿屋やどやがあつたりして、とても賑にぎやかな町でした。

ある日、町の南側の谷から、蛭子さんえびすの形をした小さな石が出てきました。蛭子さんというのは商売が繁盛はんじょうするようにお守りして下さる神様なのです。町の衆しゅうは、この石を大切に持ち帰つて、道端みちばたに台をつくつておまつりをしました。

すると不思議なことに、古市の町は前よりもっと商売が繁盛するようになり、たいそう栄えて来ました。

けれども、いつの頃からか、町の景気が悪くなって来たのです。ふと気がつくと、おまつりしてあつたはずの蛭子さんがなくなっていたのです。

町の人達は、きつとあの蛭子さんがいなくなったので景気が悪くなったのだらうと、八方手を尽くして探しました。いろんな所へ商売に行った人や、あちこちから商売に来た人などの話から、大阪の南で、最近えらく景気の良い町があるということを開き、大阪へ商売に行った人がついでに立ち寄つてみると、その町の道端に蛭子さんがまつつてありました。よく見ると、古市で無くなった蛭子さんだったのです。

さっそく、夜を待つてこつそりとその蛭子さんを取り返して帰りました。

町の人達は、

「これでひと安心や、えらい遠いところへ行つとつたたんやけど、これからはまた古市の町を守つてもらえますようどうか頼みます」

「以前のように商売が繁盛しますよう、よろしゅうおたのみします」
と、それぞれの願いをかけて、またもとどおりの場所へおまつりしたのです。すると、町は前のように景気が良くなって来ました。ところが大阪の南の町の景気が悪くなって来て、その町の人には蛭子さんが無くなったのに気付き、さっそく古市へやって来てまたまた蛭子さんを持って行ってしまったのです。

するとまた、古市の町の景気が悪くなって来たのです。町の人達は、また大阪の人に持つて行かれたと気付き、はるばる大阪の南へ出かけてみると、今度は取り返えされないようにと、小さな祠ほこらが造られ、しっかりと鍵かぎまでかけてありました

仕方なく古市へ帰つて町の人達に訳わけを話し、相談したのです。

「以前のように景気がようなるようには、どないしたらよいやろなあ」

「蛭子さんに守つてもらわんと、どないもならへんしなあー」

「そや、蛭子さんのご神体しんたいを木でつくつてもろうたらどないやろ」

というわけで、みんなで相談して宗玄寺の住職に頼み、木の御神体を作つてもらいました。

それからは、町が繁盛したので、ご神体をおまつりする祠を建てることになりました。蛭子さんの形をした小さな石が出てきた谷を「蛭子谷えびすだに」と呼んでいきます。